

まとめ

1 UH - 1出土の青磁碗について

今回検出されたアイヌ文化期の平地式住居跡UH - 1から舶載陶磁器である青磁碗が出土している。青磁碗は北海道内で出土した青磁の中でも最も点数が多く、青磁の中でも比較的時期の判別がしやすい。最近の道内における中世陶磁器の研究史については鈴木 信「北海道の中世陶磁器」『ユカンボシC15遺跡(4)』(2001)に概略が記されている。道内出土の中世陶磁器の集成と論考は、近年、越田賢一郎(1995、1997年)、吉岡康暢(2001)、鈴木 信(1995、2001)、石井淳平(2003)らにより行われ、その位置付けが考察されている。その中で青磁碗もとりあげられており、ここではそれらの成果を基に、道内出土の青磁碗について考察し、UH - 1の青磁碗の位置付けを行う。

(1)北海道内での出土例の概略

青磁碗は道央～道南にかけて現在24ヵ所確認され、点数は概数で2,421点出土している。分布は渡島半島南端部の遺跡が多い。その中でも上ノ国町勝山館、函館市志苔館、上磯町矢不来館など、館関連の遺跡からの出土が多く全点数の95%を占める。特に昭和54(1984)年から継続して調査が行われている勝山館からは1,908点出土しており、全点数の約8割を占めている。次いで、道央地方日本海側の遺跡が多く、余市町大川遺跡からは85点出土している。これらの館関連の遺跡や交易地と考えられる大川遺跡を除くと、一遺跡での出土点数は少なく一遺跡あたり10点以下になる。

さらに遺跡内での出土状況を見ると、館関連の遺跡以外では土坑墓の出土例が多い。森町御幸町遺跡アイヌ墓、大川遺跡P - 41、小樽市船浜遺跡SK08、泊村堀株1遺跡出土のアイヌ文化期の土坑墓がある。その他の遺構としては、大浜中遺跡出土の青磁は埋納遺構と考えられている。また、住居跡から出土したものとしては今回のチブニー 2遺跡UH - 1出土例が唯一である。

(2)青磁碗の分類

分類に関しては上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究 2』1982に準拠して行った。道内では上田分類のB～E類が確認できるが、A類、D - 類は出土していない。また、位置付けの不明なものも若干ある。

B類：連弁文をもつもの。道内出土の資料は比較的多い。

B - 類(1～6)：幅の広い片切彫の鎬蓮弁文をもつもの

資料は少ない。小樽市船浜遺跡SK - 08(1)、余市町大川遺跡(2～6)出土のものがある。遺構から出土した青磁碗は、船浜遺跡SK - 08(1)、及び大川遺跡P - 41(2・3)があり、どちらも土坑墓の副葬品である。他の資料は包含層出土である。2・3は実測図の連弁文には鎬がないが、本文での説明及び写真では鎬がみられる。これらは道内で出土した青磁碗の最も古い段階のものであり、年代は13世紀後半～14世紀前半と考えられる。森町御幸町遺跡1号墓そば出土の青磁碗(7)も、写真から判断するとB - 1類に相当する可能性がある。

B - 類(8～20)：幅の広い蓮弁を片切彫で表現するが、蓮弁部の盛り上がりを失ったもの。

道内出土の資料は比較的多い。余市町大浜中遺跡(8・11)、函館市志苔館跡(10・12・17～20)、上ノ国町勝山館跡(9)、同町洲崎館跡(13～15)出土のものがある。9は口縁が外反する。チブニー 2遺跡出土の青磁(12)もB - 類である。年代は14世紀後半～15世紀前半と考えられる。

B - 類(21～28)：片切彫、もしくは丸彫りによって蓮弁を表現するもの。

比較的多い。上磯町矢不来館(21～25)、志苔館跡(26)、勝山館跡(27・28)出土のものがある。年代は15世紀後半と考えられる。

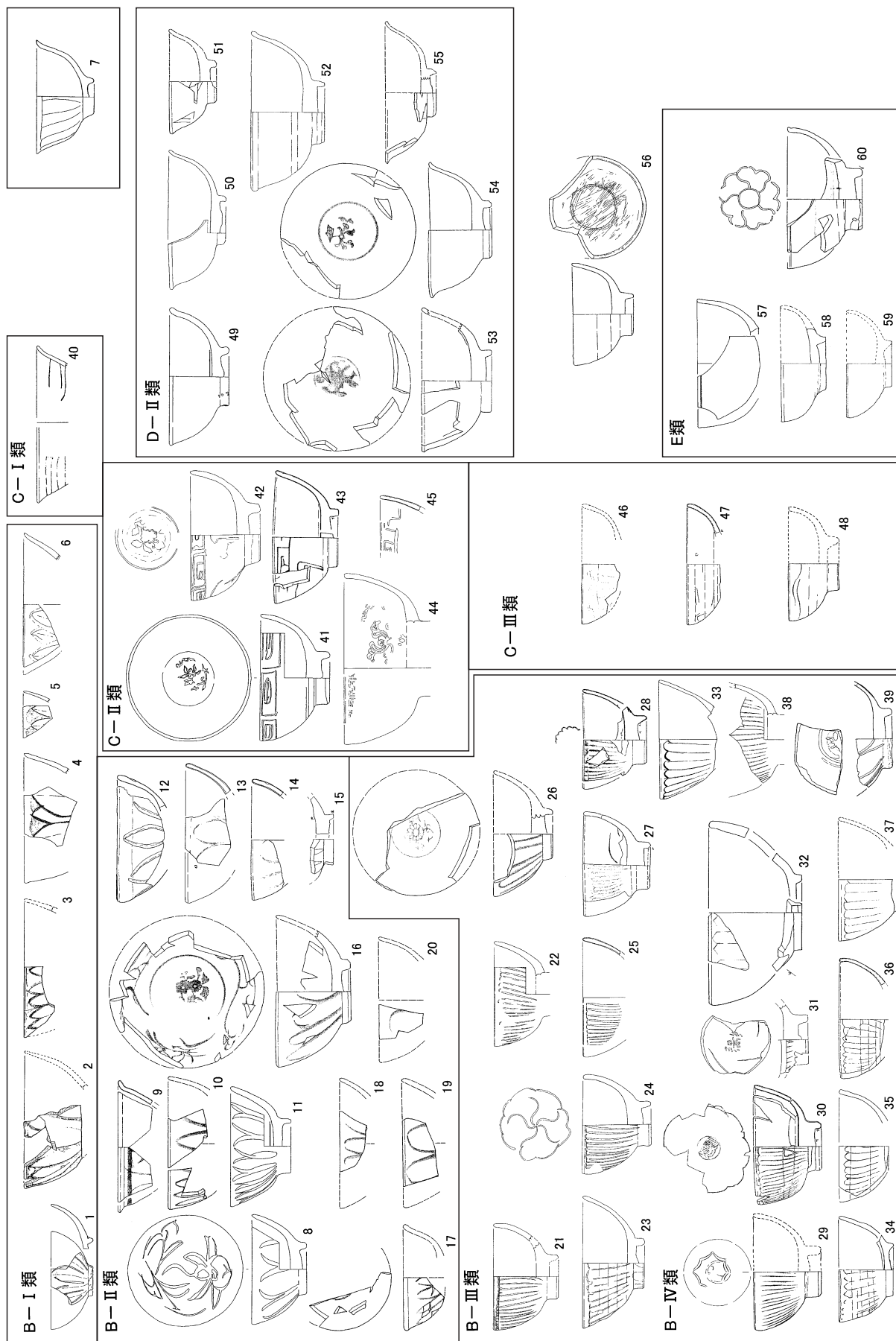


図 - 2 北海道出土の青磁碗 (S = 1 / 6)

まとめ

B - 類(29～39)：ヘラ先による細線の線描き蓮弁文をもつもの。

資料は比較的多い。勝山館(29・30、32～37)、矢不来館(31・38)、末広遺跡(39：本文 章説明)出土のものがある。39は蓮弁文の幅が広く、B - 類の可能性もあるが細線の線描きのためこの類に含めた。31は見込みに「顧氏」の銘がある。年代は15世紀後半～16世紀と考えられる。

C類：外面口縁部付近に雷文帯をもつもの。全体的に資料は少ない。

C - 類(40)：口縁部に片切彫の凹線を巡らし、数ヶ所を斜線で画するもの。

若干異なるが、大川遺跡出土のもの(40)はこの類に相当すると考えられる。口縁は外反する。年代は13世紀後半～14世紀前半と考えられる。

C - 類(41～45)：外面口縁部付近に雷文帯を持ち、雷文帯下部には片切彫の幅の広い蓮弁や、ラマ式蓮弁をもつもの。ここでは雷文帯下部に文様を持たないものも含めた。

資料は少ない。余市町大浜中遺跡(41)、上磯町矢不来館(42・44・45)、勝山館(43)出土のものがある。42・43はラマ式蓮弁文をもつ。年代は14世紀後半～15世紀前半と考えられる。

C - 類(46～48)：外面口縁部付近に簡略化した波状の雷文帯をもつもの。

資料は少ない。全て勝山館出土のもの(46～48)である。41は雷文帯の下に蓮弁文が描かれる。年代は15世紀後半～16世紀と考えられる。

D類：口縁部の外反するもの。

D - 類(49～55)：口縁部が外反し、口縁端部に丸みを持ち、釉が厚いもの。

資料は比較的多い。志苔館跡(51・53～55)、大浜中遺跡(49)、余市町入船遺跡(50)、大川遺跡(52)出土のものなどがある。年代は14世紀後半～15世紀と考えられる。

E類(57～60)：口縁部の内湾するもの

伊達市ポンマ遺跡(57)、勝山館(58～60)出土のものがある。年代は15世紀後半～16世紀の可能性がある。図 - では枠外にしたが、千歳市美々8遺跡出土の例(56)もこの時期の可能性がある。

(3)年代について

遺跡の年代と青磁碗の年代を比較してみると、大きな隔たりはみられない。ただし、上ノ国町勝山館遺跡、同町向井宅遺跡、函館市志苔館跡、余市町大浜中遺跡などでは、青磁の年代が遺跡の年代よりやや古くなっている。これらの遺跡から出土した青磁碗は伝世品と考えられる。今回のチブニー2遺跡の場合も青磁碗の年代とUH - 1の焼土出土の炭化物による炭素年代測定結果を比較すると、青磁碗の年代が古くなっている。青磁碗は14世紀後半～15世紀前半で、炭素年代測定では16世紀後半という結果が出ている。両者の年代の差は、他の例と比べても大きいが伝世品の可能性が高い。

(4)小結

道内出土の青磁碗は14世紀後半～16世紀にかけてのものが出土しており、道南～道央にかけて分布している。特に道南の分布が濃い。出土数を年代別にみると13世紀後半～14世紀前半は少量で、14世紀後半から多くなり、16世紀まで続く。青磁碗の分布、出土状況、年代観は、越田賢一郎、吉岡康暢、鈴木 信らの研究とほぼ一致している。出土遺跡の性格としては館跡、交易地、墓、住居跡などがあり、館跡、交易地から多く出土している。出土量では蓮弁文をもつB - ～ 類、無文のD - 類が多く、勝山館、矢不来館跡などの館跡から多く出土している。

今回のチブニー2遺跡出土の青磁碗は、道内出土の中では最も東端の遺跡から出土している。分類はB - 類に相当し、年代は14世紀後半～15世紀前半で、類例としては志苔館、洲崎館、大浜中遺跡出土例がある。チブニー2遺跡の出土例は、アイヌ文化期の平地式住居跡から出土している点、伝世品と考えられる点が特徴として挙げられる。(広田)